



## わたしの先生



あなたにとっての「先生」は誰ですか。恩師、先輩・後輩・父母・知人、ふと出会った市井の人、あるいは物語に登場する架空の人物、遠い人・近い人…。あなたが人生で出会い、大切な何かを残してくれた人（時に半面教師だったとしても…。）そんな「わたしの先生」について寄稿して頂くシリーズです。



こぶしの花  
高田敏子  
あなたの好きな  
こぶしの花がさきました  
ご健勝にお過ごしのご様子  
およろこびしています

### K'mio talks

#### 美味しい音楽は 糠漬けを仕込むように

9月に演奏会が決まり、やる事が多くなって大変になってきました。

私達音楽家は どうやって 普段の時間を過ごしているかという、先ず兎にも角にも譜面を見る、という事からスタートします。詩も何度も読み返します。可能なら音読します。そして譜面に書かれている情報を隈無く頭に入れていきます。その作業はミキサーに材料を入れていく作業、またはぬか床に漬け物を仕込んでいく作業に似ています。そしてそれらを攪拌、または醸造させることで別の美味しい食べ物、食材が出来上がります。音楽ではそれが美しい音楽に生まれ変わるのです。その作業を思い出せば解るでしょうが、いい加減な仕込みでは美味しいものはできません。普段どうやって音楽と向き合っているか、それが提供する時に必ず問われます。頑張りましょう！！

(Noboru Kamio)

#### 佐々木 団長の 断腸の思い

##### あれから1年

震災から1年が経ちました。皆様も個々にこの1年を振り返って見たことでしょうか。

震災直後は四谷中が使えなくなり、ショコラも影響を受けました。今では練習が出来てあたりまえのようになりましたが、練習再開直後はお互いの元気な顔が見れること、共に歌えること、そのことに感謝したと思います。自らを振り返ってみるという作業はときには重要なことだと思います。

私が合唱を始めた理由のひとつはハーモニーを体感したかったからです、ひとたび合唱の輪の中に入ってみると自分の体が他の人の声と共鳴し大変感激したことを今でも覚えています。それ以降、合唱の旅が始まったのですが、その途中で合唱を通して色々な経験をし、人と出会い、今でも旅が続いています。

皆さんも壁にぶつかった時には合唱の旅を振り返り、初心の頃や印象深い出来事を思い出してみたいかがでしょうか。

(佐々木 晋)

#### バレンタイン・コンサートの思い出

アルト 佐々木三葉子

昨年2月、ショコラにとり記念すべき『バレンタイン・コンサート』がありました。ショコラ結成7年にして初めてのホールコンサートでした。先月結婚式を挙げた有田瑞希さんですが、彼女は実行委員会の中心となり皆を引っ張ってくれました。共に委員を努めた私とは親子ほど年も離れ、当然のことながら「バレンタイン」に関する意識も違い(笑)演出等を巡り議論しました。夜間まで飛び交った携帯メールを懐かしく思い出します。メインに「愛」をテーマとした曲を皆で選定し、神尾先生、美苗先生の熱いご指導のもと真剣に練習しましたね。そして本番では、華やかで暖かな雰囲気の中にお客様をお迎えし、ショコラの歌を楽しんでいただくことができたように思います。なかでも印象に残った「百万本のバラ」は、コンサート後のアンケートで一番多く票を集めた曲です。団員皆の気持ちが合わさって力強い声になり、お客様に届いたと感じています。これからも歌のメッセージを伝えられるよう練習していきましょう！



#### 黙って教えてくれた人

テナー 山田 武雄

子どもの頃の私は、自分の意思を言葉や行動で表現することが不得意でした。

3, 4年生の頃だったでしょうか。近所で新築の家の棟上げがありました。土地の風習で、棟上げの時にはきなこでくるんだお餅が振る舞われるのです。周りの友だちは屈託のない笑顔でお餅を頬ばっていましたが、私は友だちの陰で一度も手を伸ばすことができませんでした。家に帰ってどんな報告をしたのか忘れましたが、母が、大豆を石臼で挽いた即席のきなこでおにぎりを作ってくれたことだけ、はっきりと思い出することができます。

父は頑固・短気の見本のような人で、できるだけ離れていたいような雰囲気を感じていました。でも思い出すのは、春のお花見のときも秋祭りの神輿を見るときも、肩車をしてもらっていたことです。無器用なりにわが子をかかわりかけてくれたのだと思いますが、私も父の肩の上で身体をこわばらせながら、嬉しさも気恥ずかしさも緊張も感じていたように思います。今思うと滑稽なほどに、父も私も黙ったままでした。

子どもの性格や行動について、否定せずに、責めもせずに、愛情を注ぎ見守り導くこと…「寄り添う」ってそういうことなんだと思い努めながら教師の仕事をしてきました。



#### 背中で教え、背中から学ぶ

バス 竹花 心太

「師匠」という言葉がなんとも好きです。一般的に伝統芸能の世界で使われる言葉のようですが、直線的で重厚なイメージがします。

祖父母に連れられ、3歳から中学に入学するまで地区のゲートボール練習に参加していました。夏場は朝4時に起床し、冬場はまだ日が昇らない時間から練習場に出発し、そのまま学校へ登校。メンバーは当時の私より10倍以上長くこの世を経験してきた方々。当然はじめはまともに練習にも参加できません。しかし大先輩方の熱心な教えの甲斐あって小学校高学年の頃にはチームの主力選手に。当時はゲートボールの面白さに夢中で紅白のボールを追いかけていましたが、今思い返してみると、あの毎朝の行事が私にとって最初の師匠達との出会いであり、その後の人生の中で大きな支えとなっていると感じています。礼節、人情、お互い様の精神を先輩方の背中から学びました。

背中で教え、背中から学ぶ、そんな面倒な師弟関係は最近流行らないようですが、言葉やマニュアルだけで伝える教育から甘美な想像力って生まれるのかな〜と。おっと、ショコラの大先輩、服部さんかさんから「この年寄りが〜」と怒鳴られそうな内容ですね。すみません師匠！

#### 編集後記 2012.3.22



“花嫁のショコラと共に歌う横顔輝かし 純白のペールに包まれて”  
瑞希さんお幸せに！（三葉）



両国駅近くに「シアターX(カイ)」という最大300席の小劇場がある。マイナーながら意欲的な公演が続いている。編集子は18日まで公演していた「名作劇場」を観た。佐藤春夫「暮春挿話」と岡本かの子「ある日の蓮月尼」。どちらも1920年代に書かれた作品だが、全く個性の異なる作家を並べたのが興味深かった。入場料金1000円。この「名作劇場」は劇場創立2年後の94年からほぼコンスタントに年2回公演を続け、今回で通算34回70タイトル。企画・演出の川和 孝氏は100タイトルを目指すと話しているが一幕物という限定と安い入場料でこれまで続けてこられた努力に頭が下がる。継続するという事はそれ自体感動的なことだと思う。ショコラも8年め、改めて考えてみると“スゴイジャン”なのである。(Kobo)